論 文 審 査 の 要 旨 及 び 担 当 者

論文題名

近世ドイツの印刷ビラ、新聞、モード雑誌の言語的特徴
―口語性の展開と構文の変化を中心にして

論文審査の要旨

本論文は、宗教改革時代の 16 世紀から、ドイツ語文章語の確立の時代とされる 18 世紀後半に至るドイツ語の史的発展を、文章語における口語性の展開ないし変遷という観点から論じたものである。

第 1 章ではまず、ドイツ語圏における印刷メディアの歴史が概観される。16 世紀に宗教改革者たちは、民衆の識字率や宗教改革運動における効果に配慮して単票のビラ（Flugblatt）を印刷し、文字で書かれたビラ内容を音声で民衆に読み聞かせることで改革思想を広く普及させようとした。16 世紀後半には、日本の江戸時代の瓦版のように最新の出来事を伝えるビラである「最新報告」（Neue Zeitung）が多く刷られ、これが新聞の前身となった。17 世紀に入ると、他のヨーロッパ諸国に先駆けてドイツで週刊新聞が刊行された。その後誕生した「雑誌」（Zeitschrift）という印刷メディアは 18 世紀後半に大きく発展し、モードを扱う雑誌が登場する。印刷メディアは今や、贅沢品や流行を伝える機能ももった。『豪奢とモードのジャーナル』（*Journal des Luxus und der Moden*）は、最盛期には一つの号が２千部以上刷られ、２万人を超える読者がいたと見積もられている。

第２章では、口語性をどう理解するのか、口語性の度合いをどのように測定するのかについて方法論的考察が行われる。芹澤円氏は、口語的（話しことば的）か文語的（書きことば的）かという点は音声であるか文字であるかとは独立した問題であると認識し、例えば学術的講演のことばは音声を用いていても書きことば性が相対的に高いのに対して、個人的手紙のことばは文字で書かれていても話しことば性が相対的に高い点に着目する。これ以降芹澤氏は、「口語」・「文語」、「話しことば」・「書きことば」ではなく、Koch/Oesterreicher（1985）の「近いことば」（Nähesprache）・「遠いことば」（Distanzsprache）という用語法を採る。この「近い」という概念には、話しことば的であることに加えて、話し手（書き手）と聞き手（読み手）の心理的・コミュニケーション的な距離が近いことが含意されている。この「近いことば性」を測る方法として、本論文では Ágel/Hennig（2006）の提案した測定モデルが援用される。Ágel/Hennig（2006）のモデルでは、ミクロレベル（語句レベル）およびマクロレベル（構文レベル）における近いことばの要素（ミクロレベルでは直示表現、音脱落、呼びかけ等、マクロレベルでは

基礎文の短さ、従属節の少なさ、省略等）が数え上げられる。この合計値が、あらかじめ設定されている規準テクストと比較されて、当該テクストの「近いことば性」が百分率で算出される。ミクロレベルでのパーセントとマクロレベルでのパーセントの平均値が、当該テクストの近いことば性の最終値となる。

第３章においては、Ágel/Hennig（2006）の測定モデルが実際に適用される。16 世紀の宗教改革運動で利用された単票の印刷ビラと複数のページからなる小冊子とを比較すると、近いことば性は前者のほうが高い。単票の印刷ビラには直示表現のほかに、呼びかけ、間投詞、命令形、語末音消失、繰り返し等、近いことばの要素が多く見出され、「近いことば性」の最終値は 47.94%となる。印刷ビラでは平行法、対比法、誇張法、動物メタファー等が駆使され、揶揄や風刺が交えられ、書き手と読み手の距離が近く取られていると芹澤氏は読み解く。それに対して、複数のページからなる小冊子には 19.43%の「近いことば性」しか計測されない。小冊子は、語りかけるものではなく、モノローグの文体なのである。次に、17 世紀初頭の週刊新聞の近いことば性を計測するときわめて低い値が算出され、週刊新聞が「遠いことば的」なテクストであることが明らかにされる。

第４章では、新聞というメディアの言語の「遠いことば性」がさらに確認される。同じ 17 世紀初頭であっても、新聞の前身である「最新報告」は「週刊新聞」と比べると遠いことば性が低い。最新報告には受動態が少なく、複合的な名詞句も、前置詞句を構成する単語数も少なく、数珠つなぎ複合文（主文のあとにいくつも副文が連なる構文）も少ない。18 世紀末に刊行された日刊新聞を見てみると、「遠いことば的」であることは変わらないが、18 世紀の日刊新聞では 17 世紀の週刊新聞と比べて数珠つなぎ複合文が半減している、その一方で、動作名詞を中核に置いた名詞句の使用が顕著である。これを芹澤氏は、17 世紀には副文を連ねていくことで出来事に関する付帯状況（原因、経緯等）が列挙されて伝えられたのに対して、18 世紀には付帯状況等に関する情報が動作名詞を中核に置いた名詞句によって表され、文全体として見ると情報をコンパクトに伝達する形式となったと解釈する。

第５章においては、18 世紀末のモード雑誌が取り上げられる。文化の商業化のなかで、モード雑誌には流行のモード品を宣伝し読者に購買させる狙いがあった。モード雑誌は、18 世紀末の日刊新聞と比べて、副文の使用頻度に有意な差は認められないが、動作名詞以外の名詞による前置詞句が多い。前置詞の頻度がきわめて高いことを芹澤氏は、モード雑誌について約７万語のデータを集積してコーパス言語学の手法で分析して確かめている。これらの前置詞句は、モード品の由来、形状、品質等に関する情報を与えるために効果的に用いられていると、芹澤氏は指摘する。新聞が時間軸で出来事を「物語る」テクストであるのに対して、モード雑誌は空間軸で事物を「記述する」テクストであると、芹澤氏は考える。芹澤氏のコーパス分析によれば、モード雑誌に最も頻繁に出現する名詞は「モード」（Mode）であるが、この語と統計学的に有意な相関関係にあるのは「一般の」（allgemein）と「新しい」（neu）である。ここからは、モード雑誌の記事の書き手にとって、モード品が好んで一般に広く受け入れられること、また最新のものとして認知されることが重要であったことがわかる。記事の書き手は、モード

品の魅力を読者に伝えるべく使用語彙をうまく制御して、読者との関係を近くしようとしている。例えば、「推奨する」（empfehlen）という指令型の動詞、「理想的な」（ideal）、「高貴な」（edel）、「趣味のよい」（geschmackvoll）等の高価値語の使用、また比較級・最上級表現がそれである。このようにして記事の書き手は、書き手にしか直接体験できない質感などを魅力的に発信していると、芹澤氏は解釈する。

第 6 章では、Ágel/Hennig（2006）の測定モデルが批判的に検討され、改良案が提示される。16 世紀から 18 世紀までのドイツ語に関して時代性を考慮することなく近いことば性を一律に認定することの問題性、言語規範の揺れに関する配慮の欠如、受動態や特定の外来語彙（ラテン語、フランス語）を「遠いことば的な」要素として算入する必要性、また基礎文の総語数を最上位に置いてマクロレベルの近いことば性を計算する手法の問題性などである。芹澤氏はさらに、ミクロレベルとマクロレベルの平均値をテクストの最終的な「近いことば性」の値として示すという Ágel/Hennig（2006）の計測モデルの根幹部分に疑義を呈する。両レベルを平均化してしまうことで、それぞれのレベルにおける「近いことば性」の割合の特徴が見えなくなるというのである。芹澤氏はそれを補うべく、縦軸の上半分をミクロレベル、下半分をマクロレベルにして、横軸に百分率の数字を入れて、それぞれのレベルの値について三角形ができるような表示法を提案する。この座標軸表示により、両レベルの「近いことば性」の値がたしかに一目で把握できる。

第 7 章は「結論」の章である。芹澤氏は、前章までの研究成果を詳細に総括し、さまざまな印刷メディアを、すなわち、16 世紀からは印刷ビラ・小冊子、17 世紀からは「最新報告」・週刊新聞、18 世紀からは日刊新聞・モード雑誌を取り上げて、構文、句構造、語彙、修辞学的技法等の視点から多角的に記述することで、近世ドイツ語文章語の言語的特徴を共時的、通時的に記述できたことを確認する。そして、近世におけるドイツ語文章語の発展が、これらの印刷メディアの一連の発展と関連していて、ドイツ語文章語の特徴や現代ドイツ語文章語に至る成立過程の本質的な一局面が、それぞれの印刷メディアにおける「近いことば性」の度合いの違いによって説明可能であるという結論を導く。

以上のように、芹澤円氏による本論文は、近世ドイツ語のテクストを「近いことば性」、「遠いことば性」の視点から分析したものである。まず、文字で書かれた文章語を一律に「書きことば」と考えずに、文章語のなかにさまざまな度合いの口語性が存在するという芹澤氏の視点が評価される。この問題意識から行われたドイツ語史研究はまだ歴史も浅く、困難な問題を多く含む未開拓の分野であるだけに、さまざまなテクストを取り上げて実証的に分析し、一定の成果をあげたことの研究史的意義は大きい。同様に、テクストにおける「近いことば性」を表す言語的パラメータを設定し数値化することによって、近世ドイツ語テクストの比較を客観化できた意義も大きい。その際、特定の一ジャンルのテクストに関して 16 世紀から 18 世に至る時代的変化を追うのではなく、宗教改革運動のビラ・小冊子、新聞の前身である「最新報告」と週刊新聞、日刊新聞とモード雑誌といったテクストジャンルの多様性を配慮し、これらの言語的特徴を記述したことは、従来の研究の射程を大きく広げたものであると言える。さらに、テクストの統語分析にとどまらず、句、語彙、修辞技法など多角的に分析したこと

も、この論文の成果を豊かなものにしている。「近さ」という概念設定から、書き手（話し手）と読み手（聞き手）との関係性の近さ、読み手への訴求力という観点を常に念頭に置きながら言語表現の特徴を論述している点も評価される。さらにまた、Ágel/Hennig（2006）の測定モデルの方法論を批判的に検討し、芹澤氏自らが改良案を具体的に提示した点は高く評価される。ただし、「近いことば性」、「遠いことば性」の認定に際しては、心態詞等の主観的表現や、場所・時間・様態・程度の直示表現等に関して、語用論的な考察がさらに可能で、その効果に関する記述も拡充させる必要があろう。また、論述において明瞭さが欠ける箇所も若干残されている。さらなる研究の発展が期待される所以である。

以上の理由から、論文審査担当者３名は全員一致して、芹澤円氏の学位請求論文が博士（ドイツ語ドイツ文学）の学位にふさわしい業績であると判断した。

論文審査主査　　高田　博行　　教授
岡本　順治　　教授
新田　春夫　　特別非常勤講師